

所在地：函館市白尻町 342-1, 353

発掘原因：白尻漁港臨港道路建設工事

発掘面積：820 m² (Ⅲ層・Ⅴ層)

発掘期間：令和2年5月8日～令和2年9月4日

調査主体：函館市教育委員会

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担当者：函館市教育委員会 福田 裕二, 小林 貢

調査者：(一財)道南歴史文化振興財団 坪井 睦美, 荻野 幸男 (調査担当者)

遺跡の概要

遺跡は昭和51年に南茅部電報電話局合宿舎建設に伴い発見された。函館市南茅部地域では平成26年度より白尻漁港臨港道路建設に伴う発掘調査を行っており、本遺跡は平成27年度からこれまでに4回、計4,690 m²の発掘調査を行っている。本年度の調査区は、昭和51年の調査区に隣接している。

遺跡は白尻地区の弁天岬よりやや西側に離れた標高40m程の海岸段丘上にあり、段丘の縁辺からは150m程山側に位置している。周辺は縄文遺跡の密集地であり、同一段丘面の東側には後期を主体とする白尻A遺跡が、

沢を挟んで西側には中期後半の大集落である白尻B遺跡、沢の奥部には後期の集落である白尻小学校遺跡が所在する。調査は、縄文前期～続縄文時代の遺物包含層：Ⅲ層と、駒ヶ岳f火山灰・腐植土・駒ヶ岳g火山灰：Ⅳ層の下層にある縄文早期の遺物包含層：Ⅴ層について行った。

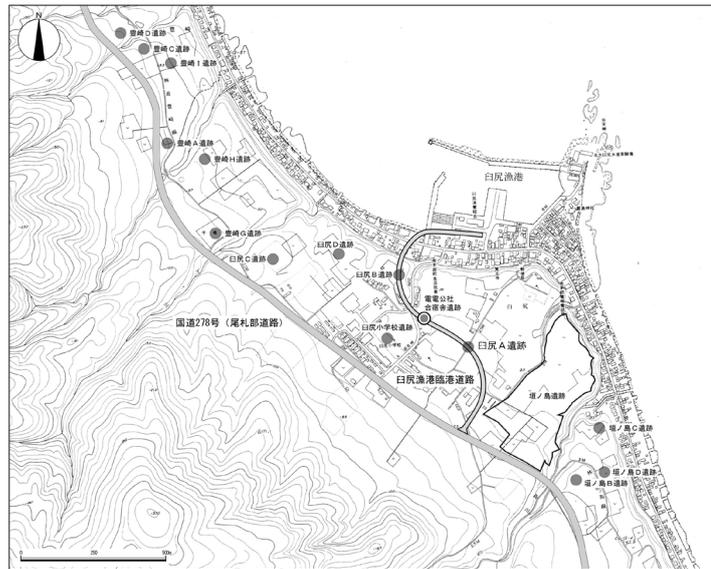


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺構と遺物

Ⅲ層の調査では竪穴建物跡1軒、土坑14基、柱穴状土坑33基、焼土2か所を確認した。竪穴建物跡は、平面形が約3.2m×3.8mの楕円形で、掘り込み面からの深さは約0.5mである。ほぼ中央に掘り込みをもつ炉と東壁際の床面にH字状に埋め込まれた礫が配置されている。柱穴は壁の外側に確認された。床面や炉内からは折り返し口縁の土器(後期前葉)が出土している。

土坑のうち1基は、断面形がフラスコ状を呈するもので、掘り込み面からの深さ約2.2m、直径約2.3mの坑底中央部には直径約0.4m、深さ約0.4mのピットが1基確認された。また周囲にも柱穴状のピットを確認しており上屋があった可能性もある。その他、石斧が埋納された土坑では、浅い掘り込みに2本の石斧が並んだ状態で出土した。緑色片岩製で、最大長約32cmと約17cmを測る。

Ⅴ層の調査では竪穴建物跡1軒、土坑101基、柱穴状土坑37基、焼土1か所を確認した。竪穴建物跡は長軸約2.6m、短軸約2.0mの楕円形で、掘り込み面からの深さは約0.5mである。時期を特定可能な遺物は出土していない。土坑は直径1m前後の円形・楕円形で、確認面からの深さは0.3m前

後のものが多い。ほとんどが自然堆積で、遺物を伴うものはごく僅かであった。土坑は分布状況から昭和51年の調査で確認された土坑群と一体のものと考えられる。

遺物はⅢ層約1,900点、Ⅴ層約900点が出土している。Ⅲ層の土器は後期前葉が主体で中期も少量みられた。Ⅴ層では早期後葉の中茶路式が主体で、貝殻文系や東釧路Ⅲ・Ⅳ式が僅かに確認された。石器では、石鏃やつまみ付ナイフ（松原型石匙）、断面三角形の擦石、石錘などが出土した。

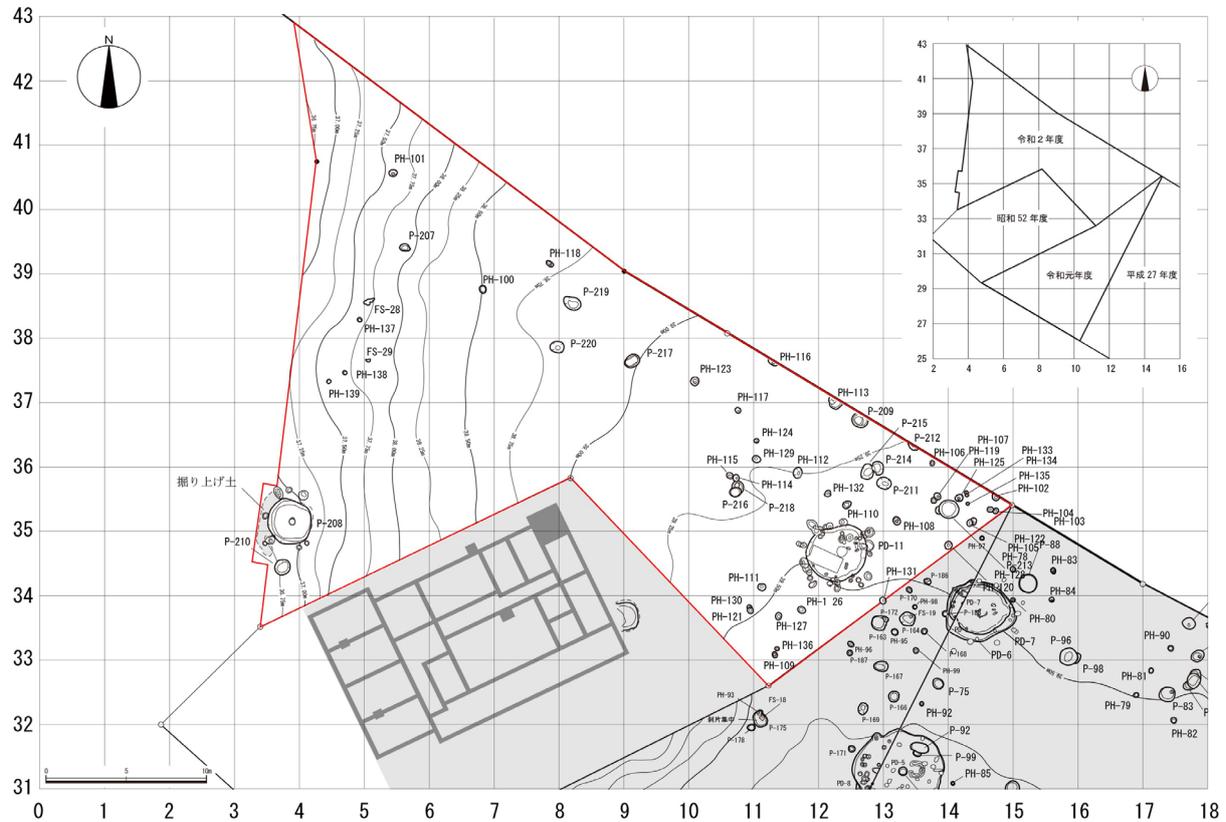


図2 遺構配置図(Ⅲ層)

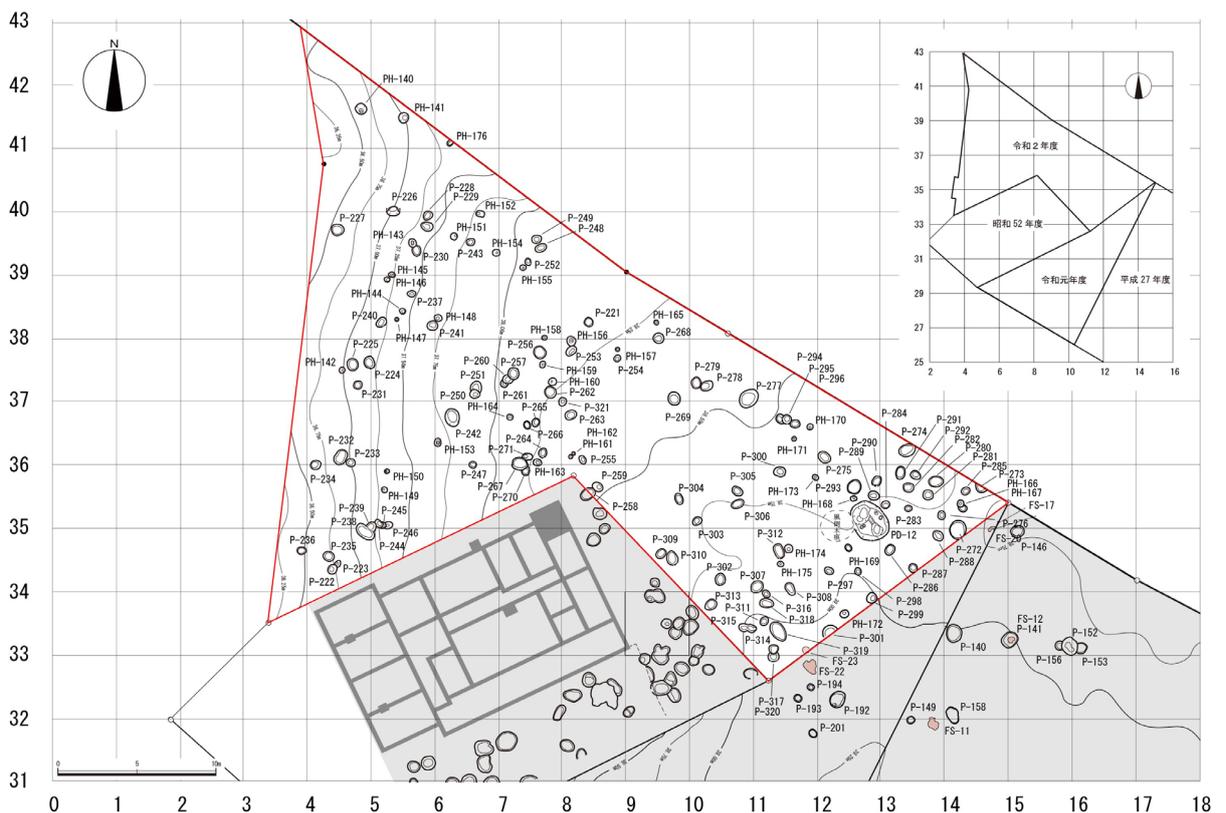


図3 遺構配置図(Ⅴ層)



遺跡全景



V層 調査風景



竪穴建物跡 (PD-11) 調査状況



竪穴建物跡 (PD-11) 完掘 (縄文後期)



フラスコ状土坑 (P-208) 土層断面



フラスコ状土坑 (P-208) 完掘



石斧埋納遺構 (P-207) 完掘



石斧埋納遺構 (P-207) 石斧出土状況



竪穴建物跡 (PD-12) 土層断面 (縄文早期)



包含層土器出土状況 (縄文早期中茶路式)